



豊橋市美術博物館友の会だより

-2010年-冬号 Vol.78

FU風伯HAKU
Winter 2010

見るだけで分からぬ部分がなければ、画家は要らない。

中村正義「創造は醜なり」より

前号では一人の画家に、「どんな美を求めるか、どのようにして美を作るのか」を聞きました。今回は一枚の絵・中村正義《うしろの人》を観て、何を感じ、何を思ったのかを色々な方に寄稿してもらいました。この絵は豊橋市美術博物館の収蔵品を代表する絵です。観る側の仕事の違い、人生の違いは、作品の受け止め方に違いをもたらすのでしょうか。

《うしろの人》— 中村正義作品を見て

谷山 勉

(株)谷山建築設計事務所 代表取締役所長



おおっ、すごい！
間近で鑑賞したが、何層にも塗り重ねられた
絵の具の層を削りだし
て描かれた絵。その立
体感あふれる絵の迫力
に圧倒された。それまで
絵とは、絵の具を塗
り重ねて描くものとい
う観念であったが、逆
に、絵の具の層を削り
だして絵を創る、その

技法の発想の非凡さに驚き、感動させられた。

絵全体、ダークトーンの中、白い白粉(おしろい)の
顔が浮き上がる舞妓さんらしき女性。どんな状況で何
を思っているんだろう、と思いをめぐらせば……。

舞妓の白い顔、眼差し、一文字に結んだ口元は、妖氣
漂い、うらめしさを感じさせる。目線の方向は、ダーク
な宇宙を連想させる闇の中に向かい、まだ遣り残したこと
がある、もっと遣りたいことがある、先はどうなる
んだろう、そう訴えているようである。

影のようなうしろの舞妓は、こちらを振り返っている
ようである。その目には穏やかさが、その背景には
明るさが感じられる。

二人の舞妓は、この絵を描いている中村正義その
もののような気がする。前面の舞妓は、まだまだこの
世でなすことある、描きたい絵があるのに…と言
わんばかりである。一方うしろの舞妓は、今までの正
義の人生、生きざまを表現しているようである。正義
の過去は、自分本来の自由奔放な創作の機会にも恵ま

れ、充実していた。そんな思いを込めて描いているよ
うに感じられる。

過去から、今、そして……先(?)。一枚の絵の中に、
正義の人生、創作活動の時空間が読み取れる。日展他、
数々の賞を受けた頃の創作活動、日展離脱後の創作活
動、異なる画風にも挑戦してきたが、死期を悟り、今、
この絵に自分の今までの生きざまを込めようとして
いるように思えてならない。中村正義が、絵画《うしろ
の人》に込めた思いの「真」はわからないが、私なりの
感じたところである。

建築設計のプランニングでは、必要な空間を有機的
に足し合わせて建築空間を創り出すが、この絵のよう
に、幾層にも重なっている絵の具を削りだし、削りだ
しの建築空間を創造してみたい！また、過去、現在、未
来の共生する時空間を建築で創ってみたい衝動に駆
られたのは、私だけだろうか。

ストイックな独自性の追求

酒井 淳

ホテルアークリッシュ豊橋 総料理長



日頃から美とは芸
術とは、と考える癖み
たいなものが僕はある。
しかし、《うしろの
人》に対峙してみると
言葉が出ない。想像以
上に圧倒されるスケー
ルだった。第一印象は、
決して美しいと思えな
かった……芸術的？何
か画を見て感じるもの

特集「人はなぜ美を求め、美を感じるのか」その2

を探す自分がいる。だが、細部を見渡し何かを見つけるよりも、見つかるはずもなく、ただ深く鮮明に脳裏に焼きついた。

正義の人物像を調べてみると奇才だ、異端児だと目にするが、生き方と作品をみて他者が云うだけで、本人はそう思っていないからだろう。僕自身、料理を作っている自分と日常ではまるで別人格で、ふと、違う自分に気づいたりする。美や芸術、自然の風景、空の色、移り行く季節、芸術家と同じ目線で感性を肥やし、その時々の心の状態で作り上げるものは絵画ではなく、料理。料理人も芸術性豊かな職業である。正義の画歴を見ると、時代により作風が違って見える。その時々の心の状態によるものだろうか、明らかに常人とは違う感性と表現力で、魅了される。

現代の美食(ガストロノミー)は、よりシェフの個性を重要視するようになってきた。食べていただく料理にシェフの世界観があり、多くの人々の共感を得ることで人気となる。未知の感覚を表現し、且つおいしく評判になれば、世界中からお客様が殺到する時代だ。勿論ご存知の通り料理界も、古く長いしきたりや徒弟制度無しでは語れず、長い歴史の中で足されたり削られたりしながら日々進化し、現代の料理がある。絵画も同じだと想うが、料理には革新的な物はあっても、革命的な物は受け入れがたい。正義のルーツの中で、同じ感覚を感じた。憧れの人物に師事し、技術や感性を学び、真似事から始まった事が、何時しか一人の表現者となる。表現者となってからも自分の道を模索する中で色々な事にチャレンジし、失敗を重ね、なんとか人に評価されるまでに至っても、納得できない自分を感じ、また苦悩し表現する。苦しくても好きなこと……誰かに何かを感じてもらいたい。一皿の料理で感動させられたら、明日からの活力になると日々想うが、簡単にはいかない。

『うしろの人』では、人間の儚さや内面、喜怒哀楽、迫り来る宿命、人との繋がり、全体の静寂さがまるで黄泉の国への入り口に見えるが、その中にも運命に抗うかの様な熱き炎も見て取れる。だが、この感覚も晩年の作品と聞いたからそう感じるのか、いや一瞬では感じ取れない、独自の芸術性がある、と僕は感じた。最初にこの画と対峙したときの感覚だ。あくまでも、僕の思想と想像だが、ストイックに、追求心とパフォーマンスを駆使した結果、自然と仕上がった作品ではないかと想った。深く暗いその時、中村正義が想い表現し

たかったこと。画という単体を感じ与えるだけではなく、その先に広がる、想いや世界を感じさせてくれる。

画家の生き様が眼から伝わって、やがて震えが来た。

鈴木伊能勢
三河市民オペラ制作委員会



その眼は真っ直ぐに私を見る。心を強くしないと、見つめるその視線に下を向いてしまいそうになる。舞妓の切なく恨みさえも感じさせる眼は、去っていく中村正義を見つめる眼なのか。それとも去らねばならないこの世と、そして共には生きて行けなくなる者への愛惜の思いを込めた彼自身の眼なのか。舞妓の着物の赤は、画家の心に激しく燃え盛る地獄の業火にも見える。

こんな眼を感じたことがある。映画『ミリオンダラー・ペイビー』(監督クリント・イーストウッド)のヒラリー・スワンク(女性ボクサー役・マギー・フィッジエラルド)とクリント・イーストウッド(トレーナー役・フランキー・ダン)の眼だ。母親からも愛情を受けたことのないマギーは、娘にさえ愛情を示したことのない老いたフランキーのジムに入門。彼のコーチを受けマギーは100万ドルのビッグマッチにまで駆け上がる。しかしラウンド終了後の反則パンチで頸椎骨折し、全身が不隨となる。さらに壊疽のため片足切断の宣告を受けたときマギーはフランキーに「自分をこの世から消して欲しい」と頼む。湧き上がる歓声、リングで浴びる光、練習を重ねた自分の力だけが試される場、それが自分らしく生きることが出来た世界。それが出来ない自分に生きるべき世界はもうない。フランキーは苦悩の末彼女の願いを叶えてやる。彼は死の間際に彼女に贈ったリングガウンに綴られたゲール語(アイルラン

ドの公用語)「モン・クシュラ」の意味を教えた。「最愛の者よ、お前は私の生きている証だ」マギー33歳。溢れる涙を止めようがなかった。いつまでも記憶に鮮やかな映画だが2度と見たくない。

画家にはやりたいこと、やるべきことがぎっしりとあったはずだ。病は自分の思い通りの絵を創造することへの障害物。画壇のしがらみも同じ邪魔者だったのだろう。この世は思う存分に駆け巡ることの出来る素晴らしい世界。

シュバイツァー博士(医師・バッハの研究家にしてオルガン奏者・ノーベル平和賞受賞)の言葉「私にとって死とはバッハが弾けなくなることだ。」

中村正義にとって死は、思うことが表現できなくなる世界に入っていくことだ。

この眼差しは怖い。諦めの眼ではない、悟りの眼でもない。これほどの想いがあり、これだけの力がありながらなぜ逝ってしまわねばならないのか。深い悲しみ、強い憤りを、そして惜別の気持ちを眼が伝える。舞妓の「うしろの人」は涙が溢れた彼自身に見える。じっと見ていると息苦しくなる。しかしいつまでも心に残り、あの眼が迫ってくる。絵を見ているのではない、画家の生き様が眼から伝わって、やがて震えが来た。中村正義享年52歳。

ひとがた 人形の裏側に潜むモノ

大野俊治
豊橋市美術博物館主任学芸員



1979年6月に開館した豊橋市美術博物館で、私が最初に担当した企画展が「中村正義展」であった。学生時代から星野眞吾を通じて正義の存在と作風は知っていたが、全国に散逸していた作品を追跡調査するうちに、次第に不思議な魅力に引き込まれ、未完(かも知

れない)の問題作《うしろの人》に出会ったとき、その想いは頂点に達した。

絵画と呼ぶには、余りにもデモーニッシュでグロテスクなあやしいモノがそこにあり、出会った瞬間、全身に鳥肌が立った。自らの死を直感した作家は、逆に生の証を執拗に塗り込めようとしたのか。極限の精神状態に追い込まれながら身をもって体感した恐怖、そこから派生した妄想や幻覚、あるいは強迫観念といった目に見えない何かを受け手の私が知覚したのかも知れない。あの時の衝撃は今も忘れることができない。

やがて《うしろの人》は、それが当然の運命であるかのように、吸い寄せられるように豊橋市美術博物館の館蔵品となり、「没後20年 - 中村正義展」の会場で再び異彩を放った。

私はかつて、胡粉(ごふん)の白粉(おしろい)によって塗り固められた、感情を抑制して無表情に近い不気味なペルソナで佇む舞妓を眺めながら、画面全体を支配する土俗的な郷愁が何処から来るのか考えていた。おそらく原体験として豊橋の風土や環境が直接に影響していると思われるが、考えをすすめるうちに“人形”に辿り着いた。信仰や呪術の対象として生まれ、子供の玩具として、あるいは民衆芸術として人々に愛され育まれた人形達。時間の経過の中で手垢にまみれ、装飾として施された胡粉や泥絵具も剥げ落ち、地肌を見せながら朽ち果てようとする土人形が、画中の舞妓とその背後に潜む正義にオーヴァーラップした。伝統的な日本画の画題である“舞妓”(裏を返せば形骸化したキレイゴトの象徴)を逆手に取るように敢えて登用し、絵の具を重ねては研ぎ出すという漆工芸の影漆に似た技法により分厚く塗り重ねたマティエールによって、型破りで独創的な色彩と文様を創り出している。固定観念を捨てて、常に本物を探求し続けた絵師の生きざまが、舞妓の姿を借りて集約されているのだ。

晩年の正義には、新たな画面に挑戦するだけの体力は残されていなかった。最期の気力を振り絞り、命を賭けて加筆し続けた《うしろの人》には、自らの病魔と画壇変革との闘争の中で獲得した創造者としての強い信念と、死期を予感した焦燥にも似た悲痛な呻きが渾然と渦巻き、土俗的な逞しさと減びゆく儂さが複雑に絡み合う“真逆の双貌”を垣間みせる。そこには、絵画の概念をはるかに超越した宇宙が存在している。本物は決して流行にながされない。次の時代も色褪せることなく、人々に感動を与え続けることだろう。

創造するということ

中村正義



絵を描くということを日常としている画家にとって、創造するということは、すくなくも、この現実に対立する精神によるものである、と考える。言葉に表現できないこの考えを、絵で表現できるものとも考えられないし、その行為もいかにも無力で無意味なものとしてしか考えられない。こんなジレンマの中で、日々にあけくれているといってよい人間である。だからといって、作品として表現されたものが如何に抽象的であっても、描くという行為を日常としている我々にとっては、その行為(作品)が、言葉以上に人間の深層にふれ、総合的に、全体的に、その人間の根本にふれるもののように考えられることには変わりない。なにか言葉以上に、具現された、ごまかしようも、かくしようもない、赤裸々な人間像といったものに、ふれるような気がしてならないのである。これは一体実作者である、私、もしくは、我々のみにしか、通用しないものなのか。画家の独断なのであろうか。

芸術の精神とは、現実を批判し、反逆する心がその基調をなすものであろう。が、しかし、この現実の中にあって、創造ということを考える人間の行為としては、無知か悪意におかされていないかぎり、人間の正常な精神の反射作用とも受け取れるのである。だから自然になるということが、悪意と無知におかされることであると知った時、これに手をこまねいて見ていることのできない人間の、衝動、焦燥といったようなものが、その出口を求めて行動する人間の、嘗々とした営みといったようなものなのではなかろうか。このまったく抽象的なその行為、または作品は、意識と意識との間に、谷間とでもいいたらよいのだろうか、没我的無意識空間といったらよいのだろうか。人と人の間とでも言いたいような、永遠にとらえられない人ととの関わりの中で、何かを期待される人間

とは、という問い合わせるのであろう。

いまは、まだわからない。

(中村正義『創造は醜なり』より抜粋)

今年3月、東京国立博物館で「長谷川等伯展」を見た。最後に飾ってあったのは国宝《松林図屏風》、凛として厳しく、深い哀しみに満ちている。この「屏風」は泣いているように感じる。天才が生涯をかけて様々に描き続けたのはこの一枚の絵を生み出すためだったのだろうか。中村正義の絶筆《うしろの人》の前に立ち尽くして同じ思いを抱きました。

これほどの絵が豊橋市美術博物館には眠っている。この絵はみんなに見て欲しい。様々に感じて欲しい。

次号は色々な人に聞く「私を感動させた一枚の絵」、あなたにとって美とは何か、シリーズは続きます。

(風伯編集部)

◎中村正義《うしろの人》特別展示

12/21 (火) ~ 2/6 (日) 2階シンボル展示コーナー



中村正義 1924年(大正13)~1977年(昭和52)
《うしろの人》1977年 紙本着彩 162.1cm × 130.3cm

美術博物館の展覧会

豊橋市美術博物館収蔵品展 2000-2010

2月19日[土]~3月20日[日] 入場無料

昭和54年の開館以来、豊橋市美術博物館では資料の収集活動に力を注いで来ました。

現在、1,100点を越える美術資料を収蔵していますが、本展は2000年4月から2010年3月の間に収蔵された主要美術作品を紹介するものです。この10年で500点を越える作品が収蔵されました。

その主な内容として、平川敏夫・大森運夫といった郷土を代表する画家の作品が拡充したほか、白馬会など明治期の洋画の収集、100点を越える東松照明の写真作品、荒川修作や桑山忠明など愛知県ゆかりの現代作家の作品収蔵があげられます。また、後藤和子氏のご遺族より個人コレクション

が寄贈されたことで、よりいっそう収蔵品の幅が広がりました。

こうした新収蔵のコレクションをおさめた収蔵品目録の発行を機に、本展では全館を使って代表的な作品を展示紹介し、近年の収集活動の動きをあらためてご覧いただきたいと思います。

また、会期中には特任館長による記念講演会をはじめ、美術講座やボランティア・ガイド、出品作品点から人気の高い上位10点を選び出す「この10年のベスト10」といった各種記念イベントも行います。収蔵絵画や作家についての関心を深め、親しむ機会となれば幸いです。

○記念講演

2/19(土) 午後2時~(1階講義室)

金原宏行特任館長「当館のコレクション～この10年～」

○美術講座「学芸員の選ぶこの1点」

①2/26(土) 大野俊治 ②3/5(土) 岡田亘世

③3/12(土) 細田樹里 ④3/19(土) 丸地加奈子

いずれも午後2時~(1階講義室)

○ボランティア・ガイド

土曜日を除く毎日(ただし、2/20(日)は除く)

午後1時半~/午後2時半~

〈展示構成〉

- 1階第1展示室／近代日本画I
- 第2展示室／近代洋画から前衛表現へ
- 第3展示室／多様な絵画表現
写真(東松照明・水越武)
- 2階第1展示室／草土社を中心
- 第2展示室／中村正義「瀬湘八景」
- 第3展示室／杉本健吉のスケッチ
- 第4展示室／近代日本画II
- 第5展示室／後藤和子コレクション(絵画・彫刻・工芸)



岸田劉生「田村氏の肖像」1914年(大正3)



平川敏夫「奥飛騨寒日」1997年(平成9)



中村正義「瀬湘八景／江天暮雪」1964年(昭和39)



森清治郎「日本の民家」1979年(昭和54)

展覧会紹介

二川宿本陣資料館の展覧会

—寅年から卯年へ— 新年の干支と張り子の玩具展

12月11日[土]～1月16日[日] *1/10[月・祝]は開館、翌11[火]は休館

毎年、新しい年への期待と願いを込めて、干支にかかるる様なものが作られていますが、郷土玩具も、干支の動物をかたどったものが数多く作られています。この展覧会では、豊橋市美術博物館所蔵の大口コレクションから、平成22年の寅、平成23年の卯に関する郷土玩具を中心に展示します。

また、寅にちなんで張り子の虎も数多く展示しますが、虎以外にも、犬張り子やお面などでよく知られている張り子の玩具は、郷土玩具のなかでも土人形に次いで数多く、全国各地で様々なものが作られました。そうした色々な張り子の玩具もあわせて紹介します。



かみしも兎(伏見土人形・京都府)



張り子虎(三春張り子・福島県)

◎二川地区ぐるっとワクワクスタンプラリー 開催中！

期間：2月27日(日)まで

豊橋市の〈総合動植物公園〉〈自然史博物館〉〈視聴覚教育センター・地下資源館〉〈二川宿本陣資料館〉の4館を見学してスタンプを集めた方に記念品を差し上げます。

◎春の七草展－人日の節句－

1月4日(火)～10日(月・祝)

春の七草や正月を彩る盆栽を展示します。

すきな作品をえらぼう 一開催報告一

◎日時=10月17日[日] 10:00～15:00 ◎場所=美術博物館

こどもたちに美術博物館に親しんでもらうためのイベント「すきな作品をえらぼう」(友の会主催)を開催しました。理事の皆さんご協力を得て豊橋まつりで豊橋公園に来たこどもたちにアンケートを配布し、展示室をまわってすきな作品を選んでもらいました。このイベントを一つのきっかけとして、気軽に美術博物館に来てくれるようになればと願っています。

Q: 美術博物館に来たのは何回目? (参加者:292人)

初めて(142人:48.6%)	2回目(54人:18.5%)	3回目(43人:14.7%)
4回目(19人:6.5%)	5回以上(22人:7.5%)	無回答(12人:4.1%)



作品を選ぶこどもたち

秋の研修旅行アンケートから

◎日時=11月10日[水] 日帰り ◎見学先=唐招提寺、法華寺、奈良国立博物館「正倉院展」、(昼食:奈良ホテル)

●鑑真和尚という人物の名前は知っていたが、日本のために大いに尽くしてくれたことに改めて感謝しました。現代の豊かな時代と大きく違っていたであろう700年代の様子は想像もつきませんが、そのような時代に異国との発展のために最期まで尽くすことができるとは、想像に絶するものがあります。

●国宝の建物、仏像をみせていただきよかったです。法華寺の尼寺の様子、はじめて訪れることが出来ました。十一面觀音に光明皇后の面影をしのびつつ拝観しました。正倉院展はにぎやかでしたが71項目を見る事が出来ました。汗が出ました。

●奈良ホテルの昼食美味。上品に少しずつが何よりでした。



唐招提寺金堂の前で

前号の風伯アンケートから

●「すりもの展」感想 戦後生まれの私は、明治から昭和初期までのことはよく知らない。社会の授業も3学期くらいになると時間が足りなくなるのか、明治以降は早足で進んでしまうからあまりはじめない。「すりもの展」はそんな私の心をいっぺんに明るくしてくれた。戦争があって不安だったと思う時の民衆の中にも、こんな素敵なかわいいデザイン画や浮世絵

風の広告があった時代は、うす暗い部屋の片隅で見て楽しんでいた人々が思い起こされる。(本多和慶 1153)

●『風伯』がだんだんおもしろくなっていると思います。編集する人の気が伝わってきます。収蔵庫の大きなものができるといいなと思っています。(加藤正敏 553)

収蔵品紹介

[ポントワーズ]

荻須高徳●OGISU,Takanori (1901-1986)

1937(昭和12年) 油彩・麻布、額装 80.3cm×100.0cm
平成20年度購入

パリの街並みを生涯描き続けた荻須が彼地に渡ったのは1927年、東京美術学校を卒業してまもなくのことです。本作品を描いた時にはすでに日本を離れて10年の歳月が経っています。この時期、荻須はユトリロ、佐伯、ヴラマンクなどの画風を吸収・消化し、感傷や激しさからも離れて、独自の視点でパリの街並みに對峙しようと試みました。前年にはサロン・ドートンヌ会員の推挙を受け、パリでの地位を確固としたものにしていました。

ポントワーズとはパリ郊外(北西に約20km)にある町で、同地はピサロが長年滞在し、風景を描いたことでも知られています。しかし、印象派的な緑と陽光に輝く田園の光景ではなく、街並そのものに注目した点が荻須らしいといえるでしょう。また、狭い街路によって視点を奥へといざなうドラマティックな構図はここではみられず、壁面のマティエールも他の作品のような重厚感あるものとは異なります。曇天の多い荻須の風景のなかで、めずらしく青空ものぞいており、2~3の人物も点景として描きこまれています。さらに、雲の流れや人物の動きによって時間的な要素も加えられ、画面左端にはフランス国旗をはためかせ、右端の家屋に塗布されたトリコロールカラーと対比させるなど、全体に軽快な印象を与えています。パリの喧騒を離れたことが、このような開放的な表現



を促したのかもしれません。

この作品の描かれた3年後、ドイツ軍のパリ侵攻を受けて荻須は日本に帰国を余儀なくされます。そのような時勢のなかでも、本作品はのびやかに資質を發揮した戦前の画業のひとつの成果を示すものといえるでしょう。

(豊橋市美術博物館学芸員 丸地加奈子)

*本作品は常設展示室にて2/6まで、また「収蔵品展2000-2010」にて2/19(土)~3/20(日)の期間展示します。

編集後記

『風伯』の編集を通して「美」について考える機会が多くなりました。美を感じる心。美の記憶。心地よい美。普遍的な美。

散歩でも、美を探して日本庭園に行きました。緑樹緑草に映える紅葉や水面に舞い降りた白鳥。数寄屋の縁に敷かれた絨毛氈。滝の水音を耳にしながら、四季の豊かさの中で日本文化の美に心酔しました。

特集では、中村正義の『うしろの人』の各人各様の鑑賞ノートをご堪能いただいたこと思います。さすがに感性に磨きをかけ、立ち位置を確実なものにしている方々だけあり、作品を引き寄せた力量の大きさに感服しました。

正義の全てが込められ、観るものを見たじろがせるほどのこの作品は、生きる意味を問うて観る者を試すような「厳しい美」があるように思いました。気迫に圧され、まっすぐ向き合える用意が自分にはまだ無い気さえします。皆さまも12月21日からの特別展示でぜひ対面してください。

(福島陽子)

【表紙作品】

中村正義 1924年(大正13)~1977年(昭和52)

『うしろの人』(部分) 1977年 紙本着彩 162.1cm×130.3cm

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第78号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会

会長 宮田正人

担当副会長 神野能生子

編集長 鈴木伊能勢

編集委員 福島陽子 金田順子

協力 豊橋市美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882

平成22年12月20日発行